

目を追うごとに、寒さがますます厳しくなっています。こんな時節にふさわしい『手ぶくろを買いに』という題名の絵本を、皆さまはご存知ですか。新見南吉による、あまりにも有名なこの本。老若男女を問わず、読んだことのある方も少なくないのでは。

詳細な筋書きは割愛させていただきますが、物語のクライマックスはなんとといっても、子狐が、自分の手を人間のものに変化させて、手袋を買いに店を訪れる場面。手袋を買うために住処を出て、夜道を歩いてきた子狐は、開いた店の戸の隙間から細く漏れるまぶしい照明に驚き、あやまって元の狐の手の方で、お金を差し出してしまおうのです。当然、店の主人は、その珍客の正体に気付きます。それでも彼は、子狐を追い払ったりせず、その小さな手に合う温かい手袋を、誠実にも売ってくれます。私が幼い頃にこの本を読み、この場面にいたく感動したのを、今でもはつきりと覚えています。

自答を繰り返します。私の心にもっとも強く訴えかけたのは、まさにその言葉でした。幼い頃には気づくことのなかった、「子どもを思う母狐の恐怖心」や「庇護愛ゆえの疑心暗鬼」、そして、敵であるはずの人間が、我が子に親切にしてくれた事に對する「純粹な驚きと感動」に、心を打たれたのです。

「子どものころに読んだ本を、大人になつてから再び、ひも解くということ」。その意味を、今こそ考えてみたいと思います。

おそらく「物語」のもつ役割とは、自分に似た登場人物や、正反対の登場人物と出会い、その人生を追体験することで、自分の生き方を考え、よりよい人生をつむぐ手助けとなることでしょう。それに加え、「その物語を人生のいつのタイミングで読むか」ということも非常に重要な意味を持つのもかもしれません。同じ挿絵の、同じ物語であっても、人生の中で数度にわたって味わい、その度ごとに授けられる、まばゆい宝石のような新しい発見や示唆。それこそが「物語の深み」であり、「物語の真の味わい」です。

この冬は、温かい部屋の中で、お父さん・お母さんが昔好きだった本を、親子で楽しんでみてはいかがでしょう。

連載・青少年健全育成シリーズ 第305回

「絵本の読み聞かせから感じた事」

青少年の声かけあいさつ運動の推進
『大人も子どももすすんであいさつをしよう』

毎月第1日曜日は「家庭の日」
毎月第3日曜日は「青少年を育む日」です。
青少年育成都留市民会議編集委員

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています
(10,300部発行)ので、多くの方の目に触れます！

問合せ：総務課 法制広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,570	2カ月掲載
内面	2色刷り	10,280	2カ月掲載

掲載月は、①1・2月②3・4月③5・6月④7・8月
⑤9・10月⑥11・12月の6パターンとなります。
掲載状況は、下記をご参考としてください。
また、詳細につきましては、ぜひお問い合わせください。

広告掲載欄

広告掲載欄